

▶▶▶加藤 裕治

木下恵介生誕110周年

浜松出身の映画監督・木下恵介が今年、生誕百十周年を迎える。浜松市中央区にある「木下恵介記念館」でも、十月八日に木下恵介生誕百十周年記念シンポジウム「木下恵介のまなざしを探る」が開催される。恥ずかしながら、私も講演させていただくことになった。

この文章を読んでいる多くの方が、木下監督についてよく知ってらっしゃると推測するのだが、簡単に経歴に触れておきたい。木下監督は戦時下の一九四三年に「花咲く港」（軽快なタッチを含むコメディで、今見ても大変興味深い）で監督デビュー。黒澤明監督の「姿三四郎」とともに、この年の山中貞雄賞を受賞し、以後、二人は日本の映画の中心的存在として活躍する。

ひとつ代表作をといえば、壺井栄の小説を映画化した「二十四の瞳」（五四年）になるだろう。同年は黒澤監督の「七人の侍」も公開されたが、同年のキネマ旬報ベストテンの一位は「二十四の瞳」で、名実ともに日本でトップの映画監督であった。

今回、監督の生誕の地・浜松で講演させていただくのは大変名誉なことなのだが、私はメディアと社会を研究する一方、これまで木下監督を研究したことはない。浜松には熱心なファンも多く、生前の監督に直接、お会いしている方々もいらっしゃる。発表の準備段階から緊張している。

講演で私に与えられたタイトルは「木下恵介とテレビドラマ」である。このタイトルでピンとくる方もいらっしゃると思うが、木下監督は六四年に松竹を辞め、現TBSの「木下恵介劇場」でテレビドラマ制作に乗り出す。その後自身の名前を冠にしたドラマ枠を十年以上にわたり続けていく。その中で、脚本家として著名な山田太一を見いだしたことも知られている。

このようにテレビ界にも大きな足跡を残した木下監督だが、視聴できるテレビドラマは限られ、これまで語られることも少なかった。今回、このテレビ時代の活躍の一端を紹介し、監督の新たな一面を見いだすことができたかと考えている。

（静岡文化芸術大教授）

2022年9月18日
中日新聞（朝刊）p.5